

基本になっている。

- (3) 黒乾糙苔：乾燥してざらざらした黒苔で、舌質は紅～絳である。湿熱あるいは熱盛による津液の消耗を示す。

黒苔は急性化膿性疾患にみられることが多く、重篤な慢性病でも発生する。高熱・脱水・かびの発生・出血による血球内鉄分の吸着などが関連するのではないかと考えられる。

4 舌苔・舌質の変化

舌象の変化は、すべて淡紅舌・薄白苔からはじまる。

1) 外感病における変化

- (1) 寒邪：風寒による表証（表寒）では、舌苔・舌質に変化はない。進行するにつれて白苔は厚くなり、寒邪が化熱すると黄色に変化し、裏熱になると黄乾苔・紅舌となる。湿・痰・食積と合併すれば黄膩苔が生じ、さらに進行すると黒苔となり舌質も絳を呈する。
- (2) 熱邪：風熱による表証（表熱）では、舌苔に変化はないが、舌尖・舌辺が紅色を呈し、比較的早期に紅～絳舌に移行する。舌苔も熱邪が強まるとともに黄乾苔・黄黒苔・黄糙苔・黄裂紋苔に変化する。
- (3) 燥邪：外感燥邪では、薄白乾苔があらわれる。燥邪は津液を消耗しやすいので、黄苔を生じるまえに白乾苔を発生することが多い。
- (4) 湿邪：寒湿では厚白滑苔、湿熱では黄滑苔、食積をとまなえば白膩苔・黄膩苔となる。湿熱の場合には、熱証があっても舌苔は湿潤していることが多いが、熱邪によって津液が消耗したときには類乾苔を呈する。

2) 内傷病における変化

血虚・陰虚

血虚では舌質は淡白である。陰虚の初期には少し紅舌を呈するだけであるが、津液が消耗して虚熱があきらかになるとともに紅舌から絳舌に変化する。陰虚が長期間続き程度が強くなるにつれて絳舌・光滑舌となり、はじめは部分的な光滑舌であるのが次第に全舌におよび鏡面舌を呈する。さらに進行すると瘦薄舌になり、ひからびる。痰・湿・食積をとまなうときは、舌の中央が紅色（絳色）無苔で周辺に白苔・舌根部は紅色（絳色）無苔で舌尖部に白苔・半載

白苔などの、病邪の性質と陰虚の部位に応じた舌象があらわれる。

参考までに、舌の部位と臓腑の関係を図3-2に示すが、この関係は絶対的なものではなく、あくまで補助的なものである。

気虚・陽虚

気虚・陽虚では淡白舌胖大で舌苔は薄白苔や淡黄乾苔であり、湿痰をとまなえば滑苔となる。寒証が強まると淡白舌から青白舌に変わり、白苔から黒苔へと変化する。

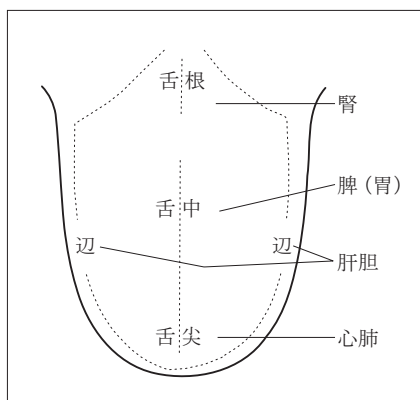


図3-2 舌の部位と臓腑との関係

E. 顔面・頭部の形態と色沢

1 頭

小児の頭の形が大きすぎたり小さすぎるのは、腎精不足あるいは痰飲をとまなう。

泉門が陥凹しているのは津虚・陰虚，高く隆起しているのは熱盛が多い。頭蓋縫合が閉じず首がすわらないのは腎精不足である。

2 頭髪

中年以降に頭髪がうすく白くなるのは正常な現象で，青年の白髪も一般には病態ではない。

頭髪がまばらでつやがないのは，腎虚あるいは気虚・血虚である。

3 眼

眼に光彩があり動きが正常なものは軽症か予後がよく，眼に光彩がなく動きが緩慢なものや瞼をとじて眼をあけたがらないものは重症のことが多い。

上方凝視・共同偏視・凝視などは，肝風内動が多い。瞳孔が散大するのは死が近いことを示す。